

源氏物語

紅葉賀

紫式部

青空文庫

青海の波しづかなるさまを舞ふ若き心

は下に鳴れども

(晶子)

朱雀院すざくの行幸は十月の十幾日ということになつていた。その日の歌舞の演奏はことに選よりすぐつて行なわれるという評判であつたから、後こうきゆう宮の人々はそれが御所でなくて陪観へいかんのできないことを残念がつていた。帝みかども藤壺ふじつぼの女御にようにお見せになることのできないことを遺憾おぼしめに思召おもほしめして、当日と同じことを試楽として御前でやらせて御覧ごらんになつた。

源氏の中将せいがいはは青海波せいがいはを舞つたのである。二人舞の相手は左大臣家の頭とうのちゆうじよう中将じやうだつだつた。人よりはすぐれた風采ふうさいのこの公子も、源氏のそばで見ても桜みやまに隣みよつた深山みやまの木きというより言い方がない。夕方前のさつと明るくなつた日光のもとで青海波は舞われたのである。地をする音楽もことに冴さえて聞こえた。同じ舞ながらも面おもてづかい、足の踏み方などのみごとさに、ほかでも舞う青海波とは全然別な感じであつた。舞い手が歌うところなどは、極楽かりようびんがの迦陵頻伽かりようびんがの声と聞かれた。源氏の舞の巧妙せうぼうさに帝は御落涙ごらくなみあそばされた。陪席へいせきした高官たちも親王方も同様である。歌が終わつて袖そでが下へおろされると、待ち受けたよう

ににぎわしく起こる楽音に舞い手の頬ほおが染まつて常よりもまた光る君と見えた。東宮の母君の女御は舞い手の美しさを認識しながらも心が平らかでなかつたのである。

「神様があの美貌びぼうに見入つてどうかなさらないかと思われるね、気味の悪い」

こんなことを言うのを、若い女房などは情けなく思つて聞いた。

藤壺の宮は自分にやましい心がなかつたらまして美しく見える舞であろうと見ながらも夢のような気があそばされた。その夜の宿直とこのいの女御はこの宮であつた。

「今日の試楽は青海波が王だつたね。どう思いましたか」

宮はお返辞がしにくくて、

「特別に結構でございました」

とだけ。

「もう一人のほうも悪くないようだった。曲の意味の表現とか、手づかいとかに貴公子の舞はよいところがある。専門家の名人は上手じょうずであつても、無邪気な艶えんな趣をよう見せないよ。こんなに試楽の日に皆見てしまつては朱雀院の紅葉もみぢの日の興味がよほど薄くなると思つたが、あなたに見せたかつたからね」

など仰せになつた。

翌朝源氏は藤壺の宮へ手紙を送った。

どう御覧くださいましたか。苦しい思いに心を乱しながらでした。

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや

失礼をお許してください。

とあった。目にくらむほど美しかった昨日の舞を無視することがおできにならなかったのか、宮はお書きになった。

から人の袖ふることは遠けれど起^たち居^ゐにつけて哀れとは見き

一観衆として。

たまさかに得た短い返事も、受けた源氏にとっては非常な幸福であった。支那^{しな}における青海波の曲の起源なども知って作られた歌であることから、もう十分に后^{きさき}らしい見識を備えていられると源氏は微笑して、手紙を仏の経巻のように拈^{ひろ}げて見入っていた。

行幸の日は親王方も公卿もあるだけの人が帝の供奉をした。必ずあるはずの奏樂の船がこの日も池を漕ぎまわり、唐の曲も高麗の曲も舞われて盛んな宴賀だった。試樂の日の源氏の舞い姿のあまりに美しかったことが魔障の耽美心をそそりはしなかったかと帝は御心配になつて、寺々で経をお読ませになつたりしたことを聞く人も、御親子の情はそうあることと思つたが、東宮の母君の女御だけはあまりな御関心ぶりだとねたんでいた。樂人は殿上役人からも地下からもすぐれた技倆を認められている人たちだけが選り整えられたのである。参議が二人、それから左衛門督、右衛門督が左右の樂を監督した。舞い手はめいめい今日まで良師を選んでした稽古の成果をここで見せたわけである。四十人の樂人が吹き立てた樂音に誘われて吹く松の風はほんとうの深山おろしのようであつた。いろいろの秋の紅葉の散りかう中へ青海波の舞い手が歩み出た時には、これ以上の美は地上にないであろうと見えた。挿しにした紅葉が風のために葉数の少なくなったのを見て、左大將がそばへ寄つて庭前の菊を折つてさし変えた。日暮れ前になつてさつと時雨がした。空もこの絶妙な舞い手に心を動かされたように。

美貌の源氏が紫を染め出したころの白菊を冠に挿して、今日は試樂の日に超えて細かな手までもおろそかにしない舞振りを見せた。終わりにちよつと引き返して来て舞うところ

などでは、人が皆清い寒気をさえ覚えて、人間界のこととは思われなかった。物の価値のわからぬ下人げにんで、木の蔭かげや岩の蔭、もしくは落ち葉の中にうずもれるようにして見ていた者さえも、少し賢い者は涙をこぼしていた。承香殿じょうきょうでんの女御を母にした第四親王がまだ童形どうぎょうで秋風樂をお舞いになったのがそれに続いての見物みものだった。この二つがよかった。あとのは何の舞も人の興味を惹ひかなかった。ないほうがよかったかもしれない。今夜源氏は従三位じゆさんみから正三位に上った。頭中将は正四位下が上になった。他の高官たちにも波及して昇進するものが多いのである。当然これも源氏の恩であることを皆知っていた。この世でこんな人に喜びしうる源氏は前生ぜんしゅうですばらしい善業ぜんごうがあったのであろう。

それがあつてから藤壺の宮は宮中から実家へお帰りになった。逢う機会をとらえようとして、源氏は宮邸の訪問にばかりかかずらつていて、左大臣家の夫人もあまり訪わなかった。その上紫の姫君を迎えてからは、二条の院へ新たな人を入れたと伝えた者があつて、夫人の心はいつそう恨めしかった。真相を知らないのであるから恨んでいるのがもつともであるが、正直に普通の人のように口へ出して恨めば自分も事実を話して、自分の心持ちを説明もし慰めもできるのであるが、一人でいろいろな忖度そんたくをして恨んでいるという態

度がいやで、自分はついほかの人に浮気な心が寄って行くのである。とにかく完全な女で、欠点といつては何もない、だれよりもいちばん最初に結婚した妻であるから、どんなに心の中では尊重しているかしのれない、それがわからない間はまだしかたがない。将来はきつと自分の思うような妻になしうるだろうと源氏は思って、その人が少しのことで源氏から離れるような軽率な行爲に出ない性格であることも源氏は信じて疑わなかったのである。永久に結ばれた夫婦としてその人を思う愛にはまた特別なものがあつた。

若紫は馴れていくにしたがつて、性質のよさも容貌の美も源氏の心を多く惹いた。姫君は無邪気によく源氏を愛していた。家の者にも何人であるか知らずまいとして、今も初めの西の対を住居にさせて、そこに華麗な設備をば加え、自身も始終こちらに来ていて、若い女王を教育していくことに力を入れていたのである。手本を書いて習わせなどもして、今までよそにいた娘を呼び寄せた善良な父のようになっていた。事務の扱い所を作り、家司も別に命じて貴族生活をするのに何の不足も感じさせなかつた。しかも惟光以外の者は西の対の主の人であるかをいぶかしく思っていた。女王は今も時々は尼君を恋しがって泣くのである。源氏のいる間は紛れていたが、夜などまれにここで泊まることはあつても、通う家が多くて日が暮れると出かけるのを、悲しがつて泣いたりするおりがある

のを源氏はかわいく思っていた。二、三日御所において、そのまま左大臣家へ行っていたりする時は若紫がまったくめいり込んでしまっているの、母親のない子を持っている気がして、恋人を見に行つても落ち着かぬ心になつているのである。僧そうず都はこうした報告を受けて、不思議に思いながらもうれしかった。尼君の法事の北山の寺であつた時も源氏は厚く布施ふせを贈つた。

藤壺ふじつぼの宮の自邸である三条の宮へ、様子を知りたさに源氏が行くと王命婦おうみよめ、中納言の君、中務なかつかさなどという女房が出て応接した。源氏はよそよそしい扱いをされることに不平であつたが自分をおさえながらただの話をしていゝ時に兵部卿ひょうぶきやうの宮がおいでになつた。源氏が来ていると聞いてこちらの座敷へおいでになつた。貴人らしい、そして艶えんな風流男とお見えになる宮を、このまま女にした顔を源氏はかりに考えてみてもそれは美人らしく思えた。藤壺の宮の兄君で、また可憐かれんな若紫の父君であることにことさら親しみを覚えて源氏はいろいろな話をしていゝた。兵部卿の宮もこれまでよりも打ち解けて見える美しい源氏を、婿であるなどとはお知りにならないで、この人を女にしてみたいなどと若々しく考えておいでになつた。夜になると兵部卿の宮は女御の宮のお座敷のほうへはいつておしまいになつた。源氏はうらやましくて、昔は陛下が愛子としてよく藤壺の御簾みすの中へ

自分をお入れになり、今日のように取り次ぎが中に立つ話ではなしに、宮口ずからのお話
が伺えたものであると思うと、今の宮が恨めしかった。

「たびたび伺うはずですが、参つても御用がないと自然怠けることになります。命じてく
ださることがありましたら、御遠慮なく言つておつかわしく下さいましたら満足です」

などと堅い挨拶あいさつをして源氏は歸つて行つた。王命婦も策動のしようがなかった。宮の
お気持ちをそれとなく観察してみても、自分の運命の陥かんせい擠せいであるものはこの恋である、
源氏を忘れないことは自分を滅ぼす道であるということとを過去よりもまた強く思つておい
でなる御様子であつたから手が出ないのである。はかない恋であると消極的に悲しむ人
は藤壺の宮であつて、積極的に思いつめている人は源氏の君であつた。

少納言は思ひのほかの幸福が小女王の運命に現われてきたことを、死んだ尼君が絶え間
ない祈願に愛孫のことを言つて仏にすがつたその効験ききんであろうと思うのであつたが、権力
の強い左大臣家に第一の夫人があることであるし、そこかしこに愛人を持つ源氏であるこ
とを思うと、真実の結婚を見るころになつて面倒めんどうが多くなり、姫君に苦勞が始まるので
はないかと恐れていた。しかしこれには特異性がある。少女の日にすでにこんな愛して
いる源氏であるから将来もたのもしいわけであると見えた。母方の祖母の喪は三か月であ

ったから、師走しわすの三十日に喪服を替えさせた。母代わりをしていた祖母であったから除喪のあとも派手はでにはせず濃くはない紅の色、紫、山吹やまぶきの落ち着いた色などで、そして地質のきわめてよい織物の小桂ここうちぎを着た元日の紫の女王は、急に近代的な美人になったようである。源氏は宮中の朝拝の式に出かけるところで、ちよつと西の対へ寄つた。

「今日からは、もう大人になりましたか」

と笑顔えがおをして源氏は言つた。光源氏の美しいことはいうまでもない。紫の君はもう雛ひなを出して遊びに夢中であつた。三尺の据柵すえだな二つにいろいろな小道具を置いて、またそのほかに小さく作つた家などを幾つも源氏が与えてあつたのを、それらを座敷じゆうに並べて遊んでいるのである。

「雛追ひなごいをするといつて犬君いぬぎがこれをこわしましたから、私よくしていますの」

と姫君は言つて、一所懸命になつて小さい家を繕おうとしている。

「ほんとうにそそつかしい人ですね。すぐ直させてあげますよ。今日は縁起を祝う日ですからね、泣いてはいけませんよ」

言い残して出て行く源氏の春の新装を女房たちは縁に近く出て見送つていた。紫の君も同じように見に立つてから、雛人形の中の源氏の君をきれいに装束させて真似まねの参内をさ

せたりしているのであつた。

「もう今年からは少し大人におなりあそばせよ。十歳とおより上の人はお雛様遊びをしてはよくないと世間では申しますのよ。あなた様はもう良人おととがいらつしやる方なんですから、奥様らしく静かにしていらつしやらなくてはなりません。髪をお梳すきするのもおうるさがりになるようなことではね」

などと少納言が言つた。遊びにばかり夢中になつてゐるのを恥じさせようとして言つたのであるが、女王は心の中で、私にはもう良人があるのだから、源氏の君がそうなんだ。少納言などの良人は皆醜い顔をしている、私はあるなりに美しい若い人を良人にした、こんなことをはじめて思つた。というのも一つ年が加わつたせいかもしれない。何ということなしにこうした幼稚さが御簾みすの外すまで来る家司けいしや侍たちにも知れてきて、怪しんではいたが、だれもまだ名ばかりの夫人であるとは知らなんだ。

源氏は御所から左大臣家のほうへ退出した。例のように夫人からは高いところから多情男を見くだしているというようなよそよそしい態度をとられるのが苦しくて、源氏は、

「せめて今年からでもあなたが暖かい心で私を見てくれるようになったらうれいと思うのだが」

と言つたが、夫人は、二条の院へある女性が迎えられたということを知りてからは、本邸へ置くほどの人は源氏の最も愛する人で、やがては正夫人として公表するだけの用意がある人であろうとねたんでいた。自尊心の傷つけられていることはもとよりである。しかも何も気づかないふうで、戯談じやうだんを言いかけて行きなどする源氏に負けて、余儀なく返辞をする様子などに魅力がなくなつた。四歳よっつほどの年上であることを夫人自身でもきまらずに恥ずかしく思っているが、美の整つた女盛りの貴女きじよであることは源氏も認めているのである。どこに欠点もない妻を持つていて、ただ自分の多情からこの人に怨みうらみを負うような愚か者になつてゐるのだとこんなふうにも源氏は思つた。同じ大臣でも特に大きな権力者である現代の左大臣が父で、内親王である夫人から生まれた唯一の娘であるから、思ひ上がった性質にでき上がつていて、少しでも敬意の足りない取り扱ひを受けては、許すことができない。帝みかどの愛子として育つた源氏の自負はそれを無視してよいと教えた。こんなことが夫妻の溝みぞを作つてゐるものらしい。左大臣も二条の院の新夫人の件などがあつて、頼もしくない婿君の心をうらめしがりもしてゐたが、逢えば恨みも何も忘れて源氏を愛した。今もあらゆる歓待を尽くすのである。

翌朝源氏が出て行くこうとする時に、大臣は装束を着けている源氏に、有名な宝物になつ

ている石の帯を自身で持つて来て贈った。正装した源氏の形すがたを見て、後ろのほうを手で引いて直したりなど大臣はしていた。沓くつも手で取らないばかりである。娘を思う親心が源氏の心を打った。

「こないのは、宮中の詩会があるでしょうから、その時に使いましよう」

と贈り物の帯について言うと、

「それにはまたもつといいのがございます。これはただちよつと珍しいだけ物です」

と言つて、大臣はしいてそれを使わせた。この婿君かみを齋かしずくことに大臣は生きがいを感じていた。たまさかにもせよ婿としてこの人を出入りさせていれば幸福感は十分大臣にあるであらうと見えた。

源氏の参賀の場所は数多くもなかつた。東宮、一院、それから藤壺の三条の宮へ行つた。「今日はまたことにおきれいに見えますね、年がお行きになればなるほどごりつぱにおなりになる方なんですな」

女房たちがこうささやいている時に、宮はわずかな几帳きちようの間から源氏の顔をほのかに見て、お心にはいろいろなことが思われた。御出産のあるべきはずの十二月を過ぎ、この月こそと用意して三条の宮の人々も待ち、帝みかどもすでに、皇子女御出生についてのお心づも

りをしておいでになつたが、何ともなくて一月もたつた。物怪もののけが御出産を遅れさせていたのであろうかとも世間で噂うわさをする時、宮のお心は非常に苦しかった。このことによつて救われない悪名を負う人になるのかと、こんな煩悶はんもんをされるのが自然おからだにさわつてお加減も悪いのであつた。それを聞いても源氏はいろいろと思ひ合はすことがあつて、目だたぬように産婦の宮のために修法しゆほうなどをあちこちの寺でさせていた。この間に御病気で宮が亡なくなつておしまいにならぬかという不安が、源氏の心をいつそう暗くさせていたが、二月の十幾日に皇子が御誕生になつたので、帝も御満足をあそばし、三条の宮の人たちも愁眉しゆうびを開いた。なお生きようとする自分の心は未練で恥ずかしいが、弘徽殿こうきでんあたりで言う詛のろいの言葉が伝えられている時に自分が死んでしまつてはみじめな者として笑われるばかりであるから、とそうお思ひになつた時からつとめて今は死ぬまいと強くおなりになつて、御衰弱も少しずつ恢復かいふくしていった。

帝は新皇子を非常に御覧になりたがつておいでになつた。人知れぬ父性愛の火に心を燃やしながら源氏は伺候者の少ない隙すきをうかがつて行つた。

「陛下が若宮にどんなにお逢いになりたがつていらつしやるかもしれません。それで私 まずお目にかかりまして御様子でも申し上げたらよろしいかと思ひます」

と源氏は申し込んだのであるが、

「まだお生まれたての方というものは醜うございますからお見せたくございません」

という母宮の御挨拶で、お見せにならないのにも理由があった。それは若宮のお顔が驚くほど源氏に生き写しであつて、別のものとは決して見えなかつたからである。宮はお心の鬼からこれを苦痛にしておいでになった。この若宮を見て自分の過失に気づかぬ人はないであろう、何でもないことも捜し出して人をとがめようとするのが世の中である。どんな悪名を自分は受けることかとお思ひになると、結局不幸な者は自分であると熱い涙がこぼれるのであつた。源氏は稀まれに都合よく王命婦が呼び出された時には、いろいろと言葉を尽くして宮にお逢いさせてくれと頼むのであるが、今はもう何のかいもなかつた。新皇子拜見を望むことに対しては、

「なぜそんなにまでおつしやるのでしょうか。自然にその日が参るのではございませんか」と答えていたが、無言で二人が読み合っている心が別にあつた。口で言うべきことではないから、そのほうのことはまた言葉にしにくかつた。

「いつまた私たちは直接にお話ができるのだろう」

と言つて泣く源氏が王命婦の目には気の毒でならない。

「いかさまに昔結べる契りにてこの世にかかる中の隔てぞ

わからない、わからない」

とも源氏は言うのである。命婦は宮の御煩悶はんもんをよく知っていて、それだけ告げるのが恋の仲なかだち介をした者の義務だと思つた。

「見ても思ふ見ぬはたいかに歎なげくらんこや世の人の惑やみふてふ闇

どちらも同じほどお気の毒だと思ひます」

と命婦は言つた。取りつき所もないように源氏が悲しんで帰つて行くことも、度が重なれば邸やしきの者も不審を起こしはせぬかと宮は心配しておいでになつて王命婦をも昔ほどお愛しにはならない。目に立つことをはばかつて何ともお言いにはならないが、源氏への同情者として宮のお心では命婦をお憎みになることもあるらしいのを、命婦はわびしく思つていた。意外なことにもなるものであると歎なげかれたであらうと思われる。

四月に若宮は母宮につれられて宮中へおはいりになった。普通の乳児ちのみごよりはずっと大きく小児こどもらしくなっておいでになって、このごろはもうからだを起き返らせるようにもされるのであった。紛らわしようにもない若宮のお顔つきであったが、帝には思いも寄らぬこととおありになって、すぐれた子どもは似たものであるらしいと思召おぼしめした。帝は新皇子をこの上なく御大切にあそばされた。源氏の君を非常に愛しておいでになりながら、東宮にお立てになることは世上の批難を恐れて御実行ができなかったのを、帝は常に終生の遺憾事に思召して、長じてますます王者らしい風貌ふうぼうの備わっていくのを御覧になっては心苦しさに堪えないように思召したのであるが、こんな尊貴な女御から同じ美貌の皇子が新しくお生まれになったのであるから、これこそは瑕きずなき玉であると御寵ちようあい愛になる。女御の宮はそれをまた苦痛に思っておいでになった。源氏の中将が音楽の遊びなどに参会している時などに帝は抱いておいでになって、

「私は子供がたくさんあるが、おまえだけをこんなに小さい時から毎日見た。だから同じように思うのかよく似た気がする。小さい間は皆こんなものだろうか」

とお言いになって、非常にかわいくお思いになる様子が拝された。源氏は顔の色も変わる気がしておそろしくも、もったいなくも、うれしくも、身にしむようにもいろいろに思

つて涙がこぼれそうだった。ものを言うようなかつこうにお口をお動かしになるのが非常にお美しかったから、自分ながらもこの顔に似ているといわれる顔は尊重すべきであるとも思つた。宮はあまりの片腹痛さに汗を流しておいでになつた。源氏は若宮を見て、また予期しない父性愛の心を乱すもののあるのに気がついて退出してしまつた。

源氏は二条の院の東の対たいに帰つて、苦しい胸を休めてから後刻になつて左大臣家へ行こうと思つていた。前の庭の植え込みの中に何木となく、何草となく青くなつている中に、目だつ色を作つて咲いた撫なでしこ子を折つて、それに添える手紙を長く王命婦おうみよぼうへ書いた。

よそへつつ見るに心も慰まで露けさまさる撫子の花

花を子のように思つて愛することはついに不可能であることを知りました。

とも書かれてあつた。だれも来ぬ隙すきがあつたか命婦はそれを宮のお目にかけて、

「ほんの塵ちりほどのこのお返事を書いてくださいませんか。この花片はなびらにお書きになるほど、少しばかり」

と申し上げた。宮もしみじみお悲しい時であつた。

袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまと撫子

とだけ、ほのかに、書きつぶしのもののように書かれてある紙を、喜びながら命婦は源氏へ送った。例のように返事のないことを予期して、なおも悲しみくずおれている時に宮の御返事が届けられたのである。胸騒ぎがしてこの非常にうれしい時にも源氏の涙は落ちた。

じつと物思いをしながら寝ていることは堪えがたい気がして、例の慰め場所西の対へ行って見た。少し乱れた髪をそのままにして部屋着の桂姿で笛を懐しい音に吹きながら座敷をのぞくと、紫の女王はさつきかれんの撫子が露にぬれたような可憐なふうで横になつていた。非常に美しい。こぼれるほどの愛嬌のある顔が、帰邸した気配がしてからすぐにも出て来なかつた源氏を恨めしいと思うように向こうに向けられているのである。座敷の端のほうにすわって、

「こちらへいらつしやい」

と言つても素知らぬ顔をしている。「入りぬる磯の草なれや」(みらく少なくて恋ふらく

の多き)と口ずさんで、袖そでを口もとにあてている様子にかわいい伶俐りこうさが見えるのである。「つまらない歌を歌っているのですね。始終見えていなければならぬと思うのはよくないことですよ」

源氏は琴を女房に出させて紫の君に弾ひかせようとした。

「十三絃げんの琴は中央の絃いとの調子を高くするのはどうもしつくりとしないものだから」

と言つて、柱じを平調に下げて搔かき合わせだけをして姫君に与えようと、もうすねてもいず美しく弾き出した。小さい人が左手を伸ばして絃いとをおさえる手つきを源氏はかわいく思つて、自身は笛を吹きながら教えていた。頭がよくてむずかしい調子などもほんの一度くらいで習い取つた。何ごとにも貴女きじよらしい素質の見えるのに源氏は満足していた。保曾ほそく呂俱ろぐ世利せりというのは変な名の曲であるが、それをおもしろく笛で源氏が吹くのに、合わせる琴の弾き手は小さい人であつたが音の間が違わずに弾けて、上手じょうずになる手筋と見えるのである。灯ひを点とさせてから絵などをいっしょに見ていたが、さつき源氏はここへ来る前に出かける用意を命じてあつたから、供をする侍たちが促すように御簾みすの外から、「雨が降りそうでございます」

などと言うのを聞くと、紫の君はいつものように心細くなつてめいり込んでいった。絵

も見さしてうつむいているのがかわいくて、こぼれかかっている美しい髪をなでてやりながら、

「私がよそに行っている時、あなたは寂しいの」

と言うと女王はうなずいた。

「私だつて一日あなたを見ないでいるともう苦しくなる。けれどあなたは小さいから私は安心していてね、私が行かないといういろいろな意地悪を言っておこる人がありますからね。今のうちはそのほうへ行きます。あなたが大人になれば決してもうよそへは行かない。人からうらまれたくないと思うのも、長く生きていて、あなたを幸福にしたいと思うからです」

などとこまごま話して聞かせると、さすがに恥じて返辞もしない。そのまま膝ひざに寄りかかって寝入ってしまったのを見ると、源氏はかわいそうになって、

「もう今夜は出かけないことにする」

と侍たちに言うと、その人らはあちらへ立つて行って。間もなく源氏の夕飯が西の対へ運ばれた。源氏は女王を起こして、

「もう行かないことにしましたよ」

と言うと慰んで起きた。そうしていつしよに食事をしたが、姫君はまだはかないようなふうでろくろく食べなかつた。

「ではお寝やすみなさいな」

出ないということは嘘うそでないかと危あぶながつてこんなことを言うのである。こんな可憐かれんな人を置いて行くことは、どんなに恋しい人の所があつてもできないことであると源氏は思った。

こんなふうに引き止められることも多いのを、侍などの中には左大臣家へ伝える者もあつてあちらでは、

「どんな身分の人でしょう。失礼な方ですわね。二条の院へどこのお嬢さんがお嫁かたづきになつたという話もないことだし、そんなふうにごちらへのお出かけを引き止めたり、またよくふざけたりしていらつしやるというのでは、りっぱな御身分の人とは思えないじゃありませんか。御所などで始まつた関係の女房級の人を奥様らしく二条の院へお入れになつて、それを批難さすまいとお思ひになつて、だれということを秘密にしていらつしやるのですよ。幼稚な所作が多いのですつて」

などと女房が言つていた。

御所にまで二条の院の新婦の問題が聞こえていった。

「気の毒じゃないか。左大臣が心配しているそうだ。小さいおまえを婿にしてくれて、十二分に尽くした今日までの好意がわからない年でもないのに、なぜその娘を冷淡に扱うのだ」

と陛下がおつしやつても、源氏はただ恐縮したふうを見せているだけで、何とも御返答をしなかった。帝は妻が氣に入らないのであるうとかわいそうに思召した。

「格別おまえは放縦な男ではなし、女官や女御たちの女房を情人にしている噂などもないのに、どうしてそんな隠し事をして舅や妻に恨まれる結果を作るのだろう」

と仰せられた。帝はもうよい御年配であったが美女がお好きであった。采女や女蔵人なども容色のある者が宮廷に歓迎される時代であった。したがって美人も宮廷には多かったが、そんな人たちは源氏さえその気になれば情人関係を成り立たせることが容易であったであろうが、源氏は見馴れているせいか女官たちへはその意味の好意を見せることは皆無であったから、怪しがつてわざわざその人たちが戯談を言いかけることがあつても、源氏はただ冷淡でない程度にあしらっていて、それ以上の交際をしようとしないので物足らず思う者さえあつた。よほど年のいった典侍で、いい家の出でもあり、才女でもあ

つて、世間からは相当にえらく思われていながら、多情な性質であつてその点では人を擧^ひ
 蹙^んさせている女があつた。源氏はなぜこう年がいつても浮氣^{うわき}がやめられないのである
 うと不思議な気がして、恋の戯談を言いかけてみると、不似合いにも思わず相手になつて
 きた。あさましく思いながらも、さすがに風変わりな衝動を受けてつい源氏は關係を作つ
 てしまった。噂されてもきまりの悪い不つりあいな老いた情人であつたから、源氏は人に
 知らせまいとして、ことさら表面は冷淡にしているのを、女は常に恨んでいた。典侍は帝
 のお髪^{ぐしあ}上げの役を勤めて、それが終わつたので、帝はお召^{めし}かえを奉仕する人をお呼びにな
 つて出てお行きになつた部屋には、ほかの者がいないで、典侍が常よりも美しい感じの受
 け取れるふうで、頭の形などに艶^{えん}な所も見え、服装も派手^{はで}にきれいな物を着ているのを見
 て、いつまでも若作りをするものだと思つた源氏は思いながらも、どう思っているだろうと知り
 たい心も動いて、後ろから裳^もの裾^{すそ}を引いてみた。はなやかな絵をかいた紙の扇で顔を隠す
 ようにしながら見返つた典侍の目は、瞼^{まぶた}を張り切らせようと故意に引き伸ばしているが、
 黒くなつて、深い筋のはいつたものであつた。妙に似合わない扇だと思つて、自身のに替
 えて源典侍^{げんでんじ}のを見ると、それは真赤^{まっか}な地に、青で厚く森の色が塗られたものである。横
 のほうに若々しくない字であるが上手^{じょうず}に「森の下草老いぬれば駒^{こま}もすさめず刈る人もな

し」という歌が書かれてある。厭味いやみな恋歌などは書かずともよいのにと源氏は苦笑しながらも、

「そうじゃありませんよ、『大荒木の森こそ夏のかげはしるけれ』で盛んな夏ですよ」

こんなことを言う恋の遊戯にも不似合いな相手だと思うと、源氏は見ねばよいがとばかり願われた。女はそんなことを思っていない。

君こし来てば手馴なれの駒こまに刈り飼いはん盛り過ぎたる下葉しもなりとも

とても色気たつぷりな表情をして言う。

「笹ささ分けば人や咎とがめんいつとなく駒な馴ならすめる森の木隠れ

あなたの所はさしさわりが多いからうつかり行けない」

こう言つて、立つて行こうとする源氏を、典侍は手で留めて、

「私はこんなにまで煩悶はんもんをしたことはありませんよ。すぐ捨てられてしまうような恋を

して一生の恥をここでかくのです」

非常に悲しそうに泣く。

「近いうちに必ず行きます。いつもそう思いながら実行ができないだけですよ」

袖そでを放させて出ようとするのを、典侍はまたもう一度追つて来て「橋柱」（思ひながら

に中や絶えなん）と言いかける所作しよさまでも、お召めしかえが済んだ帝が襖からかみ子からのぞいてお

しまいになった。不つり合いな恋人たちであるのを、おかしく思おぼしめ召してお笑いになりな

がら、帝は、

「まじめ過ぎる恋愛こひぎらいだと言つておまえたちの困っている男もやはりそうでなかった

ね」

と典ないし侍のすけへお言いになった。

典侍はきまり悪さも少し感じたが、恋しい人のためには濡衣ぬれぎぬでさえも着たがる者があるのであるから、弁解はしようとしなかった。それ以後御

所の人たちが意外な恋としてこの関係うわさを噂した。頭とう中のちゆう将しようの耳にそれがはいつて、源

氏の隠し事はたいはい正確に察して知っている自分も、まだそれだけは気がつかなんだと

思うとともに、自身の好奇心も起こってきて、まんまと好色な源典侍の情人の一人になつ

た。この貴公子もざらにある若い男ではなかったから、源氏の飽き足らぬ愛を補う気で関

係をしたが、典侍の心に今も恋しくてならない人はただ一人の源氏であった。困った多情女である。きわめて秘密にしていたので頭中将との関係を源氏は知らなんだ。御殿で見かけると恨みを告げる典侍に、源氏は老いている点にだけ同情を持ちながらもいやな気持ちがおさえ切れずに長く逢いに行こうともしなかつたが、夕立のしたあとの夏の夜の涼しさに誘われて温明殿うんめいでんあたりを歩いていると、典侍はその一室で琵琶びわを上じょうず手に弾ひいていた。清涼殿の音楽の御遊びの時、ほかは皆男の殿上役人の中へも加えられて琵琶の役をするほどの名手であつたから、それが恋に悩みながら弾いくねの音には源氏の心を打つものがあつた。「瓜うり作りになりやしなまし」という歌を、美声ではなやかに歌っているのは少し反感が起こつた。白樂天が聞いたという鄂がくしゅう州の女の琵琶もこうした妙味があつたのであろうと源氏は聞いていたのである。弾きやめて女は物思いに堪えないふうであつた。源氏は御簾みすぎわに寄つて催馬楽さいばらの東屋あずまやを歌っていると、「押し開いて来ませ」という所を同音で添えた。源氏は勝手の違う気がした。

立ち濡ぬるる人しもあらし東屋にうたてもかかかる雨そそぎかな

と歌つて女は歎息たんそくをしている。自分だけを対象としているのではなからうが、どうしてそんなに人が待たれるのであらうと源氏は思った。

人妻はあなわづらはし東屋のまやのあまりも馴れなじとぞ思ふ

と言ひ捨てて、源氏は行つてしまひたかつたのであるが、あまりに侮辱したことになると思つて典侍の望んでいたように室内へはいつた。源氏は女と朗らかに戯談じやうだんなどを言い合つてゐるうちに、こうした境地も悪くない氣がしてきた。頭中将は源氏がまじめらしくして、自分の恋愛問題を批難したり、注意を与えたりすることのあるのを口惜くちおしく思つて、素知らぬふうでいて源氏には隠れた恋人が幾人かあるはずであるから、どうかしてそのうちの一つの事実でもつかみたいと常に思つていたが、偶然今夜の会合を来合わせて見た。頭中将はうれしくて、こんな機会に少し威嚇おどして、源氏を困惑させて懲りたと言わせたと思つた。それでしかるべく油断を与えておいた。冷ややかに風が吹き通つて夜のふけかかつた時分に源氏らが少し寝入つたかと思われる氣配けはいを見計らつて、頭中将はそつと室内へはいつて行つた。自嘲じちやう的な思ひに眠りなどにははいりきれなかつた源氏は物音に

すぐ目をさまして人の近づいて来るのを知ったのである。典侍の古い情人で今も男のほうが離れたがらないという噂のある修理大夫しゆりだゆうであろうと思うと、あの老人にとんでもないふしだらな関係を発見された場合の気まづさを思つて、

「迷惑になりそうだ、私は帰ろう。旦那だんなの来ることは初めからわかつていただろうに、私をごまかして泊まらせたのですね」

と言つて、源氏は直衣のうしだけを手でさげて屏風びやうぶの後ろへはいった。中将はおかしいのをこらえて源氏が隠れた屏風を前から横へ畳み寄せて騒ぐ。年を取っているが美人型の華きやし奢やなからだつきの典侍が以前にも情人のかち合いに困つた経験があつて、あわてながらも源氏をあとの男がどうしたかと心配して、床の上になすわつて慄ふるえていた。自分であることを気づかれないようにして去ろうと源氏は思つたのであるが、だらしなくなつた姿を直さないで、冠かむりをゆがめたまま逃げる後ろ姿を思つてみると、恥な気がしてそのまま落ち着きを作ろうとした。中将はぜひとも自分でなく思わせなければならぬと知つて物を言わない。ただ怒おこつたふうをして太刀たちを引き抜くと、

「あなた、あなた」

典侍は頭中将を拝んでいるのである。中将は笑い出しそうでならなかつた。平生派手はでに

作っている外見は相当な若さに見せる典侍も年は五十七、八で、この場合は見得も何も捨
 てて二十前後の公達さんだちの中にいて気をもんでいる様子は醜態そのものであった。わざわざ
 恐ろしがらせよう自分でないように見せようとする不自然さがかえって源氏に真相を教え
 る結果になった。自分と知ってわざとしていることであると思うと、どうでもなれという
 気になった。いよいよ頭中将であることがわかるとおかしくなって、抜いた太刀を持つ
 肱ひじをとらえてぐつとつねると、中将は見頭みあちわされたことを残念に思いながらも笑ってしまっ
 た。

「本気なの、ひどい男だね。ちよつとこの直衣のうしを着るから」

と源氏が言っても、中将は直衣を放してくれない。

「じゃ君にも脱がせるよ」

と言つて、中将の帯を引いて解いてから、直衣を脱がせようとする、脱ぐまいと抵抗
 した。引き合っているうちに縫い目がほころんでしまった。

「包むめる名や洩り出もでん引きかはしかくほころぶる中の衣に

明るみへ出ては困るでしょう」

と中将が言うと、

隠れなきものと知る知る夏衣きたるをうすき心とぞ見る

と源氏も負けてはいないのである。双方ともだらしない姿になって行ってしまった。

源氏は友人に威嚇おどされたことを残念に思いながら宿直所とのいどころで寝ていた。驚かされた典侍は翌朝残っていた指貫さしぬきや帯などを持たせてよこした。

「恨みても云いひがひぞなき立ち重ね引きて帰りし波のなごりに

悲しんでおります。恋の楼閣のくずれるはずの物がくずれてしまいました」

という手紙が添えてあった。面目なく思うのであろうと源氏はなおも不快に昨夜を思い出したが、気をもみ抜いていた女の様子にあわれんでやってよいところもあつたので返事を書いた。

荒^{あれ}だちし波に心は騒がねどよせけん磯^{いそ}をいかが恨みぬ

とだけである。帯は中将の物であった。自分のよりは少し色が濃いようであると、源氏が昨夜の直衣に合わせて見ている時に、直衣の袖^{そで}がなくなっているのに気がついた。なんというはずかしいことだろう、女をあさる人になればこんなことが始終あるのであらうと源氏は反省した。頭中将の宿直所のほうから、

何よりもまずこれをお綴^とじつけになる必要があるでしょう。

と書いて直衣の袖を包んでよこした。どうして取られたのであらうと源氏はくやしかった。中将の帯が自分の手にはいつていかなかったらこの争いは負けになるのであったとうれしかった。帯と同じ色の紙に包んで、

中絶えばかごとや負ふと危ふさに縹^{はなだ}の帯はとりてだに見ず

と書いて源氏は持たせてやった。女の所で解いた帯に他人の手が触れるとその恋は解消

してしまふとも言われているのである。中将からまた折り返して、

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬる中とかこたん

なんといつても責任がありますよ。

と書いてある。昼近くになつて殿上の詰め所へ二人とも行つた。取り澄ました顔をして
いる源氏を見ると中将もおかしくてならない。その日は自身も蔵人頭くろうどのかみとして公用の多
い日であつたから至極まじめな顔を作つていた。しかしどうかした拍子に目が合うと互い
にほほえまれるのである。だれもいぬ時に中将がそばへ寄つて来て言つた。

「隠し事には懲りたでしょう」

尻目しりめで見ている。優越感があるようである。

「なあに、それよりもせっかく来ながら無駄だつた人が気の毒だ。まったくは君やつかい
な女だね」

秘密にしようと言ひ合つたが、それからのち中将はどれだけあの晩の騒ぎを言ひ出して
源氏を苦笑させたかしのれない。それは恋しい女のために受ける罰でもないのである。女は

続いて源氏の心を惹こうとしていろいろに技巧を用いるのを源氏はうるさがっていた。中将は妹にもその話はせず、自分だけが源氏を困らせる用に使うほうが有利だと思っていた。よい外戚をお持ちになつた親王方も帝の殊みかど寵しゅちようされる源氏には一目置いておいでになるのであるが、この頭中将だけは、負けていなくてもよいという自信を持っていた。このことに競争心を見せるのである。左大臣の息子むすこの中でこの人だけが源氏の夫人と同腹の内親王の母君を持っていた。源氏の君はただ皇子であるという点が違っているだけで、自分も同じ大臣といつても最大の権力のある大臣を父として、皇女から生まれてきたのである、たいして違わない尊貴さが自分にあると思うものらしい。人物も怜悧れいりで何の学問にも通じたりつばな公子であつた。つまらぬ事までも二人は競争して人の話題になることも多いのである。

この七月に皇后の冊立さくりつがあるはずであつた。源氏は中将から参議のほに上つた。帝が近く讓位をあそばしたい思召おぼしめがあつて、藤壺ふじつぼの宮のお生みになつた若宮を東宮にしたくお思ひになつたが将来御後援をするのに適当な人がない。母方の御伯父おじは皆親王で實際の政治に携わることのできないのも不文律になつていたから、母宮をだけでも後の位すに据えて置くことが若宮の強味になるであろうと思召して藤壺の宮を中宮ちゆうぐうに擬しておいでに

なつた。弘徽殿の女御がこれに平らかでないことに道理はあつた。

「しかし皇太子の即位することはもう近い将来のことなのだから、その時は当然皇太后になりうるあなたなのだから、気をひろくお持ちなさい」

帝はこんなふうにな御を慰めておいでになつた。皇太子の母君で、入内して二十幾年になる女御をさしおいて藤壺を后にあそばすことは当を得たことであるいはないかもしれぬ。例のように世間ではいろいろに言う者があつた。

儀式のあとで御所へおはいりになる新しい中宮のお供を源氏の君もした。后と一口に申し上げても、この方の御身分は后腹の内親王であつた。全まい宝た玉まのように輝やくお后と見られたのである。それに帝の御寵ちやうあい愛あいもたいしたものであつたから、満廷の官人がこの后に奉仕することを喜んだ。道理のほかまでの好意を持った源氏は、御輿みこしの中の恋しいお姿を想像して、いよいよ遠いはるかな、手の届きがたいお方になっておしまひになつたと心に歎なげかれた。気が変になるほどであつた。

つきもせぬ心の闇やみにくるるかな雲井に人を見るにつけても

こう思われて悲しいのである。

若宮の顔は御生育あそぼすにつれてますます源氏に似ておいきになった。だれもそうした秘密に気をつく者はないようである。何をどう作り変えても源氏と同じ美貌びぼうを見うることはないわけであるが、この二人の皇子は月と日と同じ形で空にかかっているように似ておいでになると世人も思った。

(訳注) この巻も前二巻と同年の秋に始まって、源氏十九歳の秋までが書かれている。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

紅葉賀

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>